

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2020

Winter

欧州文明発祥の地ギリシャ

第二特集

自然豊かな美しい南インド
古都コーチンを訪ねて

【発行】(株)ジャングレイス



壮大な歴史ときらめく海 ギリシャの旅

世界屈指の観光大国、ギリシャ。およそ4000年の歴史をもつ国は欧州文明発祥の地でもある。多くの国で用いられているアルファベットは古代ギリシャ文明から発生し、思想、建築、文学、芸術など今日に至る文化の礎を築いたといえる。地中海の中心であったアテネからは民主主義（デモクラシア）が生まれた。壮大な歴史に思いを馳せながら、ギリシャ神話にまつわる数々の文化遺産を訪ねて古代ロマンに浸り、紺碧のエーゲ海を渡りながら美しき絶景を心に刻み込もう。

アクロポリスの麓にそびえるゼウス神殿。コリント式支柱の太さからも壮大さが伝わってくる。

CONTENTS

特集

壮大な歴史ときらめく海

ギリシャの旅…………… P3

古代遺跡が

アテネの歴史を語る…………… P4

遺跡を巡ってカフェで一服

気ままな散策も楽しいプラカ地区…………… P6

青い空と海に、白い家

絶景広がるリゾート地…………… P7

PEACE BOAT Topics

クルーズ史上最大級のオーロラ発生

船上から見る光のショー…………… P10

PEACE BOAT Topics

ピースボートよさこいプロジェクト

「ほにや丸」を結成…………… P12

第二特集

自然豊かな美しい南インド

古都コーチンを訪ねて…………… P14

参加者インタビュー…………… P18

表紙の写真

眩しいほどの青空、青い海に映える、サントリーニの白い街並み。





紀元前27年に建てられた「女神ロマと皇帝アウグストゥスの神殿」跡。当時の精巧な技術を確認することができる。

大富豪アッティコスが寄贈した「ヘロド・アッティコス音楽堂」。客席は約5000。現在は修復されコンサートなどに利用されている。



アクロポリスの中心的存在の「パルテノン神殿」。柱の高さは約10メートル。縦は約70メートル、横は約30メートルある大きな神殿だ。



アテネ
Athens

古代遺跡がアテネの歴史を語る

アテネの街を歩けば、いたるところに遺跡がある。古代遺跡の象徴が「アクロポリス」。神殿や砦が築かれた小高い丘を歩いていると古代にタイムスリップしたような気分になるだろう。ライトアップされる遺跡も幻想的だ。また市街地の散策など楽しみは尽きない。博物館に寄ったり、郷土料理を味わったり、ギリシャの魅力を堪能したい。



1: 4～5万人収容できる「パナティナイコ・スタジアム」。座席は大理石でできている。シンメトリーの設計が美しい。2: スタジアムのコーナーに立つヘルメス像。



はギリシャ神話の全知全能の神ゼウスの神殿だ。
観光の合い間に市街地を散策するのも楽しい。シントAGMA広場の国会議事堂前では衛兵交代式を見ることが出来る。西側にはアテネを代表するショッピング街「エルクムー通り」が延び、観光客も多く常に賑わいをみせている。歩き疲れて小腹が空いたら、大衆食堂の「タベルナ」でギリシャの郷土料理を楽しむのもお勧めだ。

市街地にも遺跡は多い。アテネ観光の起点になる「シントAGMA広場」の周辺には、第1回近代オリンピックの会場となった「パナティナイコ・スタジアム」がある。起源前330年頃の建設で、長く埋もれていたが発掘後に修復され、2004年のアテネオリンピックではマラソンのゴール会場にもなった。スタジアム内に入り展示物などの見学もできる。その近くの、アテネ最大の神殿遺跡である「オリンピックイオン」

ギリシャの寄港地ピレウスは、首都アテネの玄関口である。いうまでもなくアテネは観光スポットの宝庫。選択肢は多いが、まず古代文明のシンボルである「アクロポリス」は外せない。その名は「高い丘の上の都市」を意味し、女神アテネを祭った古代の聖域だ。小高い丘にある神殿のなかで最も知られているのが「パルテノン神殿」。白大理石の円柱がそびえたつ重厚な神殿の完成は紀元前432年まで遡る。ドーリア式建物の最高峰といわれ、他を圧倒するような品格が漂っている。丘の麓には2つの劇場がつくられていて、そのひとつが「ヘロド・アッティコス音楽堂」。寄贈した大富豪の名を冠した音楽堂は2世紀に建設されたもので、古代遺跡でありながら現役の劇場でもある。



Greece
Athens・Santorini
Santorini
サントリーニ

まばゆいばかりの白い壁は、美しさと同時に陽射しを反射し気温の上昇を抑えるためでもある。

青い空と海に、白い家 絶景広がるリゾート地

紺碧のエーゲ海に浮かぶ、三日月の形をした絶景のリゾート、サントリーニ島。雑誌やCMなどで使われる、ブルードームを思い浮かべる人も少なくないだろう。赤茶けた断崖の上に建つ青い屋根に白い壁の建物は、絵本から飛び出てきたようで、ヨーロッパ屈指のリゾート感を漂わせる。一方で、起源前に繁栄した都市の古代遺跡や博物館、ワイナリーなど観光地としての楽しみも多く、ゆっくりりと島をまわってみたい。



切り立った崖に立つ家々と教会の鐘。



街を散策するだけでリゾート気分を満喫できる。



Plaka プラカ

街のいたるところに大小のお洒落なオープンカフェがあり休憩に最適。



入り組んだ路地にレストランや土産物屋などのお店が並び、観光客も多い。



遺跡を巡ってカフェで二服 気ままな散策も楽しいプラカ地区

プラカ地区は地下鉄のシタゲマ駅、アクロポリ駅、モナステイラキ駅を結んだ内側で、その利便性もあってアテネのなかでも多くの観光客が訪れるエリアのひとつ。アクロポリスの丘の麓に位置するので、観光ルートとしてもお勧めだ。古代から市民の生活の場として歴史を刻んできた旧市街には、昔ながらの石造りの家屋が並び緑も豊かな。細い路地に迷い込むのが楽しみ方のひとつといわれるように、歴史的な街並が保たれているなかを、ゆっくり

散策すれば異国情緒を満喫できる。アドリアヌス通り、キダシネオン通り、ムネシクレウス通りなどには多くの土産物屋が続き、お洒落なアークセサリー、雑貨など見飽きることはない。またプラカ地区にはカフェやレストランも多く、気軽にギリシャスイーツやギリシャ料理を楽しむことができる。

また、プラカ地区のまわりには遺跡も多くあり、大聖堂広場に立つ「ミトロポリオス大聖堂」は大統領宣誓式などの国家行事も行われる。そばにはビザンチン建築の装飾が見事な「ミクリ・ミトロポリ教会」もある。旧市街の入口にあたるモナステイラキ広場に面した「ハドリアヌスの図書館」はギリシャ文化に心酔していたローマ皇帝ハドリアヌスの蔵書を収めていたものとして知られる。このほか郷土芸術博物館の「ツイスタラキス・モスク」をはじめ、美術館なども多く、散策の際に気になるミュージアムに立ち寄るのもいいだろう。



プラカは散策するだけで楽しい街。路地に入っていくと小さな戸建てが並んでいる。



レストランも多く比較的リーズナブルな価格で食事ができる。



11世紀後半に建てられた趣あるカプニカラ教会はエルムー通りの中心地にある。

Greek Gourmet Food & Goods

地中海料理のひとつであるギリシャ料理。新鮮な魚介類が手に入るため、魚やエビ、貝などを使った絶品が多い。また旬の野菜も種類が多く、野菜をメインにした料理も定番だ。シンプルに素材の旨味を活かすのが特徴。ヨーグルトはギリシャで紀元前から作られていたといわれ、さまざまな料理に用いられている。



新鮮なシーフードと野菜、素材を活かした料理の数々



●グreekサラダ

ホリアティキ（田舎風）サラダとも呼ばれ、シンプルな野菜の素材にフェタチーズがのっている。

●スヴラキ

炭火でじっくり焼き上げたお肉。テイクアウトの屋台などでも気軽に食べられる。



●ケフテデス

ギリシャ風のミートボール。牛肉やラム肉のひき肉にタマネギ、スパイスなどを混ぜて作る。



●カラマリ

イカのフライ。イカはギリシャ人の好物でイカのグリルに野菜を合わせることも。



●ムサカ

家庭料理の定番。ナスとひき肉を重ねホワイトソースをかけてオーブンで焼いた料理。



●ヨーグルト

ギリシャヨーグルトは種類が多く、濃厚。ナッツやはちみつをかけて食べるとさらに美味。

雑貨からお菓子、銘産品までお土産もさまざま



〔サントリーニマグネット〕ブルードームが描かれたマグネットもある。



〔ウゾ（ギリシャのお酒）〕ワインを作った搾りかすからつくる度数の高いお酒。



〔オリーブオイル〕試飲できるお店もあるので味見して決めるのもいい。



〔青いガラス製品〕ガラス工芸品も土産物として多く並んでいる。



〔陶器製の街のミニチュア〕ギリシャの街並をモチーフにした陶器の小物。



エーゲ海の風を受けながら 最も幸せな旅人になる

ひとつが紀元前1500年頃の大噴火で埋もれた古代都市「アクロテイル遺跡」。壁画や彫刻などの出土品は「先史テイル博物館」や「考古学博物館」に展示されている。また島では良質なぶどうが育つため、ワインの生産が盛ん。ワイナリー見学をした後、テラスでグラスを傾ければ至極の幸せだ。

サントリーニ島への上陸は、テンダーボートという通船に乗り換える。島に近づきながら海から見上げる、断崖の白い街並もまた壮観である。島の中心地フィラは、海面から300メートルの崖の上にある。所要時間が5分程度のケーブルカーで登れば島が一望でき、息を呑むほど美しい景色が広がっている。海側に並んでいる眺めのいいカフェで、しばらくの間リゾート気分を満喫するのもお勧め。

島の北端に位置するのがサントリーニ第2の街、イア。石畳の細い路地にレストランや土産屋が軒を連ねる。特に白と青のコントラストの美しさは島随いで、散策の足取りも軽くなる。イアには街の景色に溶け込んだ美しい教会が多く、思わずシャッターを押したくなる風景が続く。出港時間によってはエーゲ海に沈んでいく夕日を見ることが出来る。それはまた忘れられないひとときになることだろう。

サントリーニ島は火山島であり、多くの古代遺跡が眠っている。その



1:カラフルなお店も多く、どこを切り取っても絵になる。2:高級感があり落ち着いた雰囲気のあるイアの街。3:石畳が敷き詰められた狭い路地を歩くのも楽しい。4:白と青で彩られた美しい街並はおとぎ話の世界のよう。5:散策しながら気になる土産屋に入ってみる。



島の北端にあるイアの街。絵はがきなどにも使われるサントリーニを象徴する風景。

クルーズ史上最大級のオーロラ発生 船上から見る光のショー

ピースボートクルーズのなかでも近年人気が高いのが、船からオーロラ鑑賞ができる航路だ。オーロラシーズンのアイスランドにはこれまでに何度も訪れているが、昨年12月に日本へ帰港したばかりの第102回クルーズは、今までで一番のオーロラ発生回数となった。そのときの様子とともに、船上から見るオーロラの魅力について改めて紹介したい。



船上から見るオーロラは大きく美しい。神秘的な姿と躍動感はデッキに出ている乗船者たちを圧倒した。

「一生のうち一度でいいからオーロラを見てみたい」という人は少なくない。オーロラは、緯度60〜70度付近の北極から南極を楕円形状にぐるりと囲むオーロラベルトと呼ばれるエリアで見ることができ。ピースボートクルーズでも訪れるアイスランドは、国全体がオーロラベルトの中心に入っているため、オーロラ鑑賞に最も適していると言われている。ところで、オーロラがどのように発生するかご存じだろうか。ここで少し専門的な話を紹介しておこう。太陽から地球に向かってエネルギーが放出され2、3日で地球に辿り着くが、そのなかに「電気を帯びた粒子」が存在する。地球には磁気圏という磁気のバリアがあるため、基本的にこの粒子は地球に近づくことができないが、バリアにはわずかなすき間があり、そこに入り込んだ粒子が磁気圏に到達し、大気と衝突することでオーロラが生まれるのだ。

第102回クルーズがオーロラベルトに入ったのは10月22日。最大の見せ場は26日にやってきた。通常ではあまり出ない19時半頃に船内アナウンスがオーロラの発生を報せた。乗船者がデッキに出ると、オーロラが夜空を生き物のように流れ、その姿を縦横に変えながら光のスペクトルを繰り返したのだ。圧倒的な美しさと神秘的

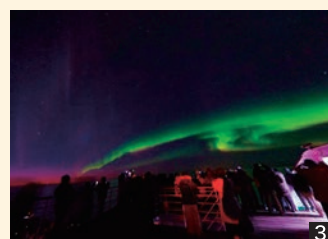
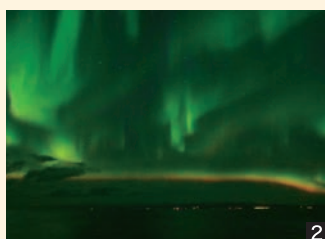
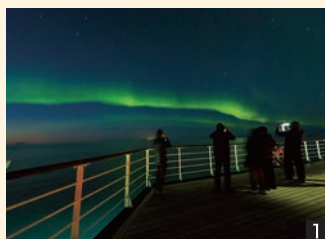
の極致に、デッキは興奮に包まれた。またその晩は特にオーロラの発生回数が多く、未明まで断続的に現われた。海上はオーロラを邪魔する光源がなく、船は雲のない海域へ移動できるメリットがあるとはいえ、大きな幸運に恵まれた夜だった。「言葉にならないほど美しく感動した」「こんなに見られるとは思っていませんでした」「オーロラのアーチをバックに写真が撮れた」、この日のオーロラのショーは、乗船者たちの心に鮮やかに残り続けることだろう。



オーロラは写真の方が色が映えるともいわれるが、肉眼で直接見られる体験は一生の思い出となる。

Northern Lights Miracle Show

1: 帯状に長くたなびいていくオーロラに向かってオーシャンドリーム号は進む。2: 複数のオーロラが、連なり重なりながらデッキ上空に現れた。3: うねりながら姿を変える。同じかたちはない光のショーが何度も繰り返し広がった。



オーロラを撮影するポイント

- ①感度：3,200〜6,400に設定。
 - ②手ブレ対策：三脚を使用。(なければ落ち着いてシャッターを切ればOK!)
- 船の一部を使ってカメラを固定するのはNG!船のエンジンの振動でかえって大きくブレてしまいます。



力強い演舞を世界各地で披露



「世界海洋デー」のトリとして登場。喝采を浴びる。



フィジーの若者たちとスポーツとダンスで親交を深めた。



ピラミッドを背景によさこいを披露。まさに異文化の交流。

最高の見せ場は、ニューヨーク。6月8日の「世界海洋デー」の国連公式イベントで、ピースボートは現地の市民団体と連携し、前日から2日間に渡りさまざまな企画を通して海洋保護のメッセージを発信した。このイベントの最後を飾ったのが「ほにや丸」のよさこいである。抜けるような青空をバックに、船上で二糸乱れぬ見事な踊りを披露し、500人を超える各国の政府代表団の心をつかんだ。空も海も青いままで次の世代に残したい、という気持ちの込められたパフォーマンスだった。演舞を終えたメンバーたちの表情も充足感に満ちていた。



トップ指導者を迎えた妥協を許さない練習で、チーム一丸となって演舞を完成させた。演舞の間、メンバーは自信みなぎる、楽しそうな表情をみせた。



高知のよさこいチーム「ほにや丸」とコラボ ピースボートよさこいプロジェクト 「ほにや丸」を結成



第101回クルーズで、ピースボート初のプロジェクトが遂行された。その名も「ピースボートよさこいプロジェクト」。ご存じ、高知県発祥のよさこいを通じて、日本文化を世界へ発信するプロジェクトとして誕生した。高知の有名なチームである「ほにや丸」とのコラボレーションによって講師に岡田良太さんを迎え、「ほにや丸」を結成。そのメンバーは日本をはじめ、アメリカ、中国、台湾、香港などの国や地域からの参加も多く、国境を越えた構成になったことも特徴だ。



1:国際色豊かなメンバーで構成された「ほにや丸」は練習を重ねるごとにチーム力がアップ。2:船内の練習場所から移動して青空の下で気持ち良く練習。

第104回クルーズで「ほにや丸」メンバーを募集します。

「ピースボートよさこいプロジェクト」は、第104回クルーズでも実施することが決定しました。年齢経験は問いません。世界へよさこいを発信することに関心がある方はぜひご参加ください。

クルーズの序盤から船内での練習がスタート。岡田さんの指導でメンバーは基本の動きから習得。練習場所では鳴子の音を響かせながら、楽しくも厳しい練習が続いた。その後、「ほにや丸」プロデュースの楽曲にのせてフォーメーションを組みながらの練習へ。用意されていたオリジナル衣裳を身に着けると一段と気持ち引き締まった。船上での練習では赤と青を基調にした衣裳が、空と海に映え、見学者たちから大きな声援が飛んだ。

重ねてきた練習の成果は、当初の計画通り各国で披露された。デビューはエジプト。なんとピラミッドが後ろに見えるホテルの屋上での演舞だった。フィジーではビーチのクリンアップやスポーツ・ダンス交流の後によさこいを披露。このほかコロンビアやオーストラリアでも演舞し、まさに日本文化を届けてきた。

SAILING AROUND THE WORLD ～アジア友好とSDGs写真展～



11月中旬、日中友好会館で「美しい地球を守りより良い未来を創る」をスローガンにした、国連SDGs（持続可能な開発目標）の取り組みをテーマに写真展が開かれた。そのオープニングセレモニーでは、水先案内人で作家・ジャーナリストの莫邦富（モトバンフ）さんや女優の東ちづるさんからもメッセージを頂戴し、ほにや丸も演舞を披露した。展示された写真は、第101回クルーズに参加した、アジア各国など10以上の国や地域の1,000名が記録した写真の中から厳選した約70点の作品である。また、12月には高知市内や中国の西安でも写真展が開催され好評を得た。今回のよさこいや写真展などのように、アートを通して発信される国境を越えた友好の証は、見る者に大きな感動を与えることだろう。



インドのコーチンはピースボートクルーズにとって、お馴染みの寄港地である。古くからアラビア海に面した商業と貿易で賑わった港町で、古代ローマ、ユダヤ、アラブなどから多くの商人が訪れた。16世紀初頭のヴァスコ・ダ・ガマの来航以来、ポルトガルによって占領され、以後、オランダ、イギリスの統治のもと、さまざまな文化、宗教の影響を受けながら独特な発展を遂げてきた。現在もインドの主要産業都市のひとつである。

コーチンの南側に位置するアレップシーの水郷地帯は、南インドの見どころとして取り上げられることが多い。ボートに乗っていくバックウオータークルーズは、探検隊気分になって、生い茂るヤシの木々、野鳥、自然植物など南インドらしい風景を楽しむことができる。「ナシヨナルジオグラフィック」誌が選ぶ「人生で訪れるべき100の風景」にも選ばれた、水と緑が織りなす楽園のような素晴らしい景色だ。また水郷は、付近に住む人々の生活の中心であり、自然とともに生きる暮らしぶりも眺めることができる。優雅な時間が流れるクルージングをぜひ楽しんでほしい。



1・2: 水辺に住む人々の昔と変わらない暮らしぶりも心を和ませてくれる。3: ボートの帆先に座って水郷を進めば気分はジャングルクルーズだ。

ヤシが茂り緑が映え、鳥がさえずる、水郷を往く



Cochin コーチン

自然豊かな美しい南インド 古都コーチンを訪ねて

賑やかな印象のある北インドに比べて、南インドは美しい自然と穏やかな雰囲気の魅力だ。南端に位置するケーララ州のコーチンは海洋の要所として古い歴史をもち、人々はフレンドリーであり、旅行者を温かく迎えてくれる。さまざまな国の文化を包み込みながら発展してきた街には、観光の見どころも多い。また水上の楽園ともいわれるアレップシーで、ボートに乗りながらのんびりクルージングすれば、極上の癒しのひとときを味わえる。

ヘルシーな南インド料理 本場の味を堪能したい

インドは北部と南部では食文化が異なる。南インドでは米飯が主食。野菜や豆、魚を使った料理が多いのも特徴。お土産は民族衣装のサリーをはじめ色彩豊かなストールやアクセサリも人気がある。

南インドのカレーは野菜や魚を使ったスパイシーな味付け。



日本でも人気の「ミールス」は定食のこと。ライスとスパイス料理を混ぜて食べる。



インドらしいカラフルな色づかいのアクセサリ。



作り手によって表情や衣装が違う特産品の操り人形。

開運のシンボル象の置物もお土産に人気。



1: 多くのスパイスが栽培されているスパイス農園の見学もインドらしい。2: ポルトガル人が建てたインド最古の教会といわれる「聖フランシス教会」。3: 本場のヨガを体験。心と身体の調和をめざして、基本の呼吸法から学ぶ。4: サリーの専門店。広げて見せてくれる、さらびやかで美しいサリーに思わず手が伸びてしまう。



マーケットにはさまざまな洋服やバッグ、雑貨などを扱う土産屋が軒を連ねる。



この地域特有の魚を捕るための仕掛け「チャイニーズフィッシングネット」。捕った魚は露店などで売られている。

旧市街で歴史を辿りインド文化にふれる

コーチンの観光名所はアラビア海に面する半島部分の旧市街(フォート・コーチン地区、マッタンチェリー地区)に多くあり、ヨーロッパに統治されていた時代の建築物や歴史とインドの伝統が混在している。

「聖フランシス教会」は1503年にポルトガル人によって建てられた、インドで最も古いキリスト教会のひとつ。インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマが埋葬されている教会としても有名だ。「シナゴーク」は紀元前からコーチンに住んでいたユダヤ人の会堂。「ダッチパレス」は、ポルトガル人が友好の証として、コーチンの王のために建設され、現在は博物館になっている。

海岸線を歩くと、巨大な網が目に入ってくる。これは植民地以前、14世紀に中国から入ってきたといわれる漁法の「チャイニーズフィッシングネット」。網を沈めた後、漁師たちは魚が入るのを待つ10メートル以上の丸太を使い、テコの原理で網を吊り上げる。このほか、お洒落な街並を散策しながら雑貨などがあるマーケットを回ったり、インドの伝統舞踊「カタカリダンス」を鑑賞したり、カレーに欠かせないスパイスを栽培している農園見学もお勧め。移動に、オートリキシャー(三輪バイク)を使えば、お土産話が増えるだろう。

女性の自立支援を考える



ケララ州では女性の教育、職業訓練に積極的に取り組んでいる。



工房を見学。手工芸品は女性たちの自立の支え、生活の糧になっている。

ケララ州はインド全土のなかで経済的に豊かな地域。そのため1960年代から出稼ぎにくる人が増え、それにより職を失うことが社会問題化した。そこで貧しい女性の生活向上のために職業訓練を行っている団体がある。プログラムでは、施設を訪れて女性たちの現状について話を聞き、技能を身につけるための裁縫や刺繍などを活かした手工芸品作りも見学する。地域レベルで行われている労働問題に対する取り組みから学ぶことは多い。

南インドの孤児院を訪ねて



施設では子どもたちの無邪気な笑顔が迎えてくれる。

周辺の街から出稼ぎにきたまま、ホームレスになり麻薬中毒になってしまっている人たちがいる。そうした背景から児童労働、人身売買の危機にさらされ、孤児院で保護された子どもたちを訪ねるプログラムだ。スポーツ道具や衣類、文具などを届けるほか、年代別の保護施設や避難シェルター見学が組み込まれる場合もある。参加者は、現地の状況を知り、また子どもたちと交流することで、インドの現状を自分事として考えるきっかけになるだろう。

ピースボートクルーズでは、スタッフが事前に現地を下見し、受け入れグループの人たちと一緒に企画する「交流プログラム」を用意している。観光地巡りとはひと味違う場所を訪ね、貴重な体験ができる人気プログラムだ。

貴重な体験機会を提供 交流プログラム



12年前の乗船からこれまで、ショートクルーズも含めると10回以上のクルーズに参加している土居タヅ子さん。ひよんなことから初体験したピースボートクルーズの魅力にはまり、その後も乗船を重ね人生が変わったという土居さんに話を伺った。

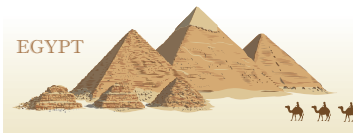
ピースボートクルーズで人生変わりました

ピースボート・クルーズアンバサダー

土居 タヅ子さん（福岡県福岡市在住）

2007年に初めての地球一周クルーズに乗船。以後、第81回、91回、99回に参加。ショートクルーズは日本一周をはじめ6回、ミドルクルーズにも乗船経験あり。現在は九州を中心にアンバサダー（地球一周の船旅親善大使）も務めている。

印象深いですね。エジプトのピラミッドやスフィンクスを見て、すぐに教科書を思い出して感動したり、トルコのキャパドキアやヨルダンのペトラ遺跡など、「すごい」というしかない景観、迫力に圧倒されました。いわゆる海外の都市などは観光で訪ねたことがありましたが、世界遺産などとは縁遠かったものですから。



ピースボートクルーズへの乗船のきっかけは何ですか

12年前、娘に勧められたことです。当時私はクルーズに興味があつたわけではなく、行きたいとも思っていま

ませんでした。しかし、たまたまピースボートクルーズの新聞広告を見た娘が電話をかけ、その足でジャパングレイスの事務所を訪れ申込手続きを行ったのです。後で聞いたら娘の友人が参加し、とても良い雰囲気を楽しめたということを知っていました。それで私は、予備知識もまったくない状態だったので、あれよあれよという間に乗船

初めてのピースボートクルーズはいかがでしたか

が決まった感じでした（笑）。今思うと、あの日の娘の行動がなければ船にも乗っていなかったでしょうし、その後の充実した毎日でもまた違ったものになつていたかもしれません。

それはもう、すごく楽しかったです。それまで仕事の都合もあり3ヵ月以上にわたる長期休暇はとれなかったため、船旅をしながら各地を巡るという体験が新鮮でした。そして船内での時間も最高で、特にカルチャースクールに参加したことで友人も大勢できました。すっかりピース



地球一周で印象に残っている国や場所はどこですか

すべて印象に残っていますが、特に第59回クルーズは初めてということ

土居さんなりの旅のこだわりはありますか

オプショナルツアー以外に、自分なりの交流も楽しんでいます。自由行動のときはその土地の観光バスに乗ったり、マーケットに行つて買い物をしたり、現地の空気を吸い、異国の文化を満喫しています。船旅なので、ウエストポーチひとつに必要なものを入れて、気軽にかけられるのがいいですね。



ピースボートクルーズの魅力はなんでしょうか

私が一番感じているのは、船内生活の充実度です。カルチャースクールが多く、自由に気軽に参加できます。また船内にフリースペースが多くてどこでもほかの乗船者の方と交流できます。私はほかの客船にも乗船していますが、そういう自由度、乗船者の交流

カルチャースクールのお仲間と下船後もお付き合いがあるそうですね



というのはピースボートだけです。いくつものカルチャースクールに入るから毎日忙しくて（笑）、夜になると船内の居酒屋やバーに集まって、みんなで賑やかに過ごします。



社交ダンス、水彩画、卓球のサークルの仲間とは、毎年、メンバーの持ち回りで開催県を変えながら、ダンスパーティー、合宿、観光などの集まりがあります。北海道から沖縄まで日本全国に仲間がいるんです。趣味をたくさんもち、交友関係も大きく広がって、ピースボートクルーズがなければ今の私の生活はないわけで、人生が大きく変わりましたね（笑）。

現在はアンバサダーとしても活動されていますね

今は地元の福岡で、乗船予定の方へ向けたイベントで自身の体験を話したりご質問にお答えしたりしています。そこでもカルチャースクールをはじめとする船内生活の素晴らしさは必ずお話ししています。私の体験を、これから乗船される方にお話ししてワクワクしていただけることがとても楽しいです。

もちろん私自身もこれからもクルーズに参加します。すでに2020年の春と夏のショートクルーズに申し込んでいます。日程の短いクルーズは自分のスケジュール次第で気軽に乗れるのが良い点です。仲間から「今度のショートクルーズどう？」という感じでお誘いの連絡が入ることもありま



すが、もう一度ブラジルに行き、未体験のリオのカニバルにもできれば参加したいですね。

これから乗船予定の方へメッセージをお願いします

船に乗ることで、人生二度目三度目の青春を謳歌できると思います。数多くの新しい出会いはもちろん、下船後もずっと続く旅仲間となつていきます。かけがえのない宝物となります。100日分の食事や宿泊費に加え、そんな貴重な出会いが旅行代金に含まれていると考えれば、私自身はお釣りがくるほど楽しませてもらっています（笑）。

いくつになっても青春は続きます——まだ見ぬ出会いに心ときめかせながら出航の日を迎えてみてください。

Let's have fun



船上百景 [お正月]



デッキで迎える初日の出は感慨もひとしおだ。それぞれが今年一年の願いを込める。

船上で迎える初日の出に感動、
今年二年も良い年でありますように

大晦日、一年も残りわずかな頃、船内ではカウントダウンパーティーが始まる。「…3、2、1」のかけ声とともに、仲間と迎える新しい年。昨年の振り返り、今年の抱負を語り合う。仲間とこのうした年越しも船旅ならではのもの。

年明け最初のイベントは、もちろん初日の出。水平線が徐々に明るくなり、ついに朝日が昇り、歓声上がる。今年二年の平穏を祈りながら、船上で迎える初日の出の大きさ、美しさに感動する。紅白の垂れ幕がかかり、お正月気分を盛り上げる。乗船者のご多幸を願う恒例の鏡開きは、「よいしょ!」のかけ声とともに木蓋が割れる音が響き福を分かちあう。この二杯も格別だ。船内では書き初め、餅つき、隠し芸などをはじめ、華やかなイベントが催され、今年も賑やかなお正月が始まった。



おせち料理をお供に仲間と一緒に新年会。



百人一首や餅つきなど正月らしいイベントがたくさん。



「元日や 我のみならぬ 巢なし鳥」
江戸時代の俳人・小林茶が、自分を含め諸般の事情や火事によって正月から家なしとなつてしまった人々を詠んだ句です。それから200年が経った現代。これだけ経済が発展した21世紀において、暖をとる家がなく路上で元日を迎える方がいる。いまの日本を二茶ならどう詠むでしょう。さらに近年は、寒さをしのぐ家はあつても、友人や近隣との付き合いがない「社会的孤立」の問題が深刻だといえます。学校や職場と家庭以外で、社会と結びつきをもつことのできる場所が少なくなつてきているのかもしれない。

そんな現代において、「ピースボートクルーズは昔の長屋みたいだね」と乗船経験のある方から言われたことがあります。「向こう三軒両軒」や「遠くの親戚より共に旅した船仲間」というように、かつての日本に多くあった「地縁」による支え合いのようなものが、船に乗ることで生まれる「船縁」としてずっと続くのもその理由のひとつでしょう。

孤立とは「助けが得られず独り切り離された状態」を指しますが、77億人が暮らすこの美しい星に、心も身体も温められる場所が少しでも増えることを願うとともに、私たちの船もそんなやさしい果となるよう、今年も一年励んでまいります。本年もどうぞよろしく願います。(N・I)